

Title	若い娘たちの表象：魂から身体へ
Sub Title	Figures de jeunes filles : De l'âme au corps
Author	小倉, 孝誠(Ogura, Kosei)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.67 (2018. 10) ,p.33- 56
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20181031-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

若い娘たちの表象

——魂から身体へ——

小 倉 孝 誠

本作〔『シェリ』〕は第二帝政期の公的世界に生きた若い娘の研究である。
エドモン・ド・ゴンクール『シェリ』(1884)、序文

若い娘は19世紀の発明である。
レミ・ド・ゲールモン『ピロードの道』(1902)

文学史を見渡すと、古代から現代まで深い水脈として連綿と語られてきたテーマ(愛、家族など)がある一方で、特定の時代に際立った存在感を放ち、数多くの作家の関心を引きつけ、多様な表象を生みだしたテーマがある。そのテーマは、前後の時代にまったく欠落しているわけではないが、ある時代状況において文化的、社会的に特異な濃密さをまとい、人々の想像力を刺激し、現代のわれわれから見ればときとして幻想や妄想に近いような表象をもたらす。そうしたテーマは空間、出来事、事件、社会現象、人物像などのカテゴリーに属する。たとえば事件で言えば、19世紀文学における革命や20世紀文学における戦争、社会現象で言えば18世紀文学におけるユートピアなどがそれに当たるだろう。

「若い娘」という形象

19世紀から20世紀初頭のフランスにおいて、文学のみならず文化史、風俗史の領域においても大きな存在感を示したのが「若い娘 *jeune fille*」である。いま仮に若い娘と訳したが、19世紀フランスの *jeune fille* についてま

ず簡単な注釈を加えておこう。年齢としては10代半ばから後半で、未婚であり、子供と成熟した女性の中に位置する。社会階層によって多少の違いはあるが、当時の女性の多くは10代後半から20代前半で結婚していた。貴族や上層ブルジョワといった上流階級の場合、娘は幼い頃まず修道院に送られて教育を受け、その後両親の家に戻って数年暮らした後、親が決めた相手と結婚して家庭を築くというのが通例のライフサイクルだった。結婚すれば年齢に関係なくもはや若い娘ではなくなり、「若い女性 *jeune femme*」という別のカテゴリーに分類される。

わずか数年間の存在を享受し、家庭という空間に保護され、純潔と処女性を求められたのが上流階級の若い娘ということになる。ブルジョワ支配の時代である19世紀が、このような社会カテゴリーを創り出したのである。もちろん10代で未婚の女性はいつの時代にも存在したが、それが明瞭な輪郭をまとめて文化的な特異性を示したのがこの時代のフランスである。冒頭に掲げたゲールモンの「若い娘は19世紀の発明である」という一文は、彼自身も生きた19世紀という時代の重要な社会史的側面を照射している。

こうした状況を根底から変えたのは、1880年代、第三共和政下における教育制度の改革だった。それまで女子教育は修道院や教会による宗教教育が大きな比重をしめ、裕福な家庭だけが個別に家庭教師を雇っていた。そこで女子が学んだのは外国語、音楽（とくにピアノ）、デッサン、礼儀作法などだった。共和国は公教育を制度化して女性にも門戸を開いたことで、女性の生活設計が多様化したのである。それにともなって、社会的カテゴリーあるいは表象としての「若い娘」は「思春期の女 *adolescente*」に取って代わられる¹⁾。現代では、10代半ばから後半の女性は一般に *adolescente* と呼ば

1) Philippe Lejeune, *Le Moi des demoiselles. Enquête sur le journal de jeune fille*, Seuil, 1993, p. 88. 19世紀における女子教育についてはいくつかの研究書があるが、主なものは以下のとおりである。Françoise Mayeur, *L'Éducation des filles en France au XIX^e siècle*, Hachette, 1979; Isabelle Bricard, *Saintes ou pouliches. L'éducation des jeunes filles au XIX^e siècle*, Albin Michel, 1985; Rebecca Rogers, *Les Bourgeoises au pensionnat : l'éducation féminine au XIX^e siècle*, P.U. de Rennes, 2007.

れる。という次第で、文化的現象、および文学的表象としての若い娘はきわめて19世紀的な人物像であり、年齢およびその意識、独身時代の長さ、結婚や家庭生活についての認識などにおいて、当時の若い娘と現代の若い娘のあいだには大きな隔たりをあることを忘れてはならない。本稿はそのことを踏まえて展開されることになる。

19世紀の小説はあらゆる社会階級、職業、年齢層に属する人物に関心をいだき、あらゆる人物類型を登場させた。そのひとつとして若い娘の心理や生態への関心を示し、文学上の人物として造形を施した。とはいえ小説家の大多数は男、しかも壮年期の男であり、10代の若い娘とは年齢的にも、意識的にも、文化的にも隔絶が大きい。男の作家たちはなぜ若い娘という人物像に関心をいだいたのだろうか。彼らによる若い娘の表象には、壮年の男の想像力が生みだした幻想や錯誤が付着していないだろうか。それがあるとして、そうした錯誤や幻想を含めて、若い娘をひとつの文化的表象として読み解くのが本稿の目的である。

「夢の女たち」の系譜

若い娘の文学表象を問いかける前に、それと姉妹関係にあるもうひとつの人物像にまず着目してみよう。若い未婚の女性への関心は、19世紀を俟ってはじめて芽生えた現象ではないのだから。

フランスを代表する感性の歴史家アラン・コルバンの近著に、『夢の女たち』²⁾ (2014、邦題は『処女崇拜の系譜』)があり、そのなかで歴史家は、古代ギリシア・ローマから中世、近代を経て20世紀にいたるまでの神話と文学に依拠しながら、男たちが憧れ、理想化し、ときには崇拜した女性たちの系譜を辿ってみせた。コルバンのいう「夢の女」とは、美、慎ましき、やさしさ、美德、純潔をすべて具えた女であり、男たち、とりわけ青年たちが理

2) Alain Corbin, *Les Filles de rêve*, Fayard, 2014. 邦訳はアラン・コルバン『処女崇拜の系譜』山田登世子・小倉孝誠訳、藤原書店、2018年。日本では、かつて澁澤龍彦がエロティシズムのひとつの形態として処女幻想を語ったことがある。『エロティシズム』中公文庫、1984年、pp. 112-124.

想化し、ときとして天使のような相貌を付与した女のことである。多くは未婚だが、稀に既婚、あるいは許婚者がいる。彼女にはしばしば男を寄せつけないような凛とした雰囲気はただよい、その身体は男の危険な欲望から隔離されているかのように守られている。聖母マリアがそうだったように、永遠の処女性を保持している女——それが「夢の女」だ。

西洋の長い歴史において、そのような女はいつ頃、どこに存在していたのか？ 現実には、生身の人間としてはいつの時代にも、どこにもおそらく存在しなかったが、男たちの想像力——あるいは妄想——のなかでは古代から常に存在してきた。不可視でありながら、あるいはまさに不可視だからこそ歴史的に遍在してきた。現実には見いだしがたいからこそ、いっそう想像性の肥大を招来するという根源的な逆説性をはらむのが「夢の女」である。ではいったい、想像力のなかに存在しながら不可視だという女をどのように捉え、論じればいいのか。

『夢の女たち』の著者が資料として選んだのは神話と、とりわけ文学作品であり、それらに着想を得た彫刻や絵画などの美術品である。こうして古代神話に登場する月の女神アルテミス（ディアーナ）から、ホメロス『オデュッセイア』に登場するナウシカ、中世イタリアのダンテ『新生』とペトラルカ『カンツォニエーレ』、17世紀のシェイクスピア『ロメオとジュリエット』、『ハムレット』、18世紀のリチャードソン『パミラ あるいは淑徳の報い』、ゲーテ『若きウェルテルの悩み』そしてベルナルダン・ド・サン＝ピエール『ポールとヴィルジニー』、19世紀のシャトーブリアン『アタラ』とネルヴァル『オーレリア』を経て、20世紀のアラン＝フルニエ『グラン・モーヌ』まで、時代と国（したがって言語）の多様性に配慮しながら、19人の夢の女たちの姿をあざやかに描きだしてみせた。

そこから明らかになるのは、時代と場所と言語の違いを超えて、夢の女の相貌と精神性が驚くほどの一貫性を保ってきたという事実である。それは逆に、夢の女を語り、描き続けてきた男たちの想像力と表象体系が長いあいだ不変だったということの意味する。女がまとう衣装や出会いの舞台装置は変化し、男女の心性や、性道徳や、生活様式や環境は時代と共に変わってきた

が、青年たちは「夢の女」をめぐるって繰り返しかえし類似したイメージを紡いできたということである。美しさ、慎ましさ、美德、貞潔、そして未婚の場合は処女性が求められ、男の欲望をそそると同時に、欲望を撥ねつけるような高貴性が望まれる。

そこで語られ、描かれ、表象される女たちは青年たちの愛の理想を凝縮させた女たちであり、同時に、青年たちにまだ知らぬ愛のかたちを夢想させる女たちである。青年たちは自己抑制をみずからに課し、想いを寄せる女を身体的な存在ではなく、霊的な存在として認識する。「夢の女」が時として天使のような存在として崇拜の対象になるのは、そのためである。19世紀のフランス人はそれを「天使化」と名づけた。現代のわれわれから見れば、ずいぶんと時代錯誤的な話には違いないし、思わず苦笑したくなるほどだ。それはコルバン自身よく承知しているところで、こうした「夢の女」という表象体系は、少なくともフランスでは20世紀前半までに完全に消滅したことを認めている。『夢の女たち』で取り上げられている最後の作品、アラン＝フルニエの『グラン・モーヌ』は1913年に刊行された小説である。コルバンの著作はその意味で、いまでは消え去った感性と情動をめぐる考古学的な考察になっている。

コルバンが詩と小説と戯曲をおもな分析対象にしているのは、文学的な表象が世紀から世紀へと、あるいはひとつの国から別の国へと、時代的および地理的な境界線を越えて継承されていくからにはかならない。ダンテやペトルルカは神話に親しみ、19世紀のロマン主義作家たちはシェイクスピアを耽読し、ネルヴァルの『オーレリア』はダンテに言及し、ラマルチーヌ作『グラツィエッタ』には登場人物が『ポールとヴィルジニー』を読む場面がある。「夢の女」は文学的な表象として創造され、書物と読書をつうじて継承され、模倣され、新たな造形をほどこされていった。そして近代以降は、学校教育をつうじて偉大な文学作品の精神と記憶がフランスの青年たちの脳裏に刻まれていった。西洋文化は「夢の女」の形象を創造し、時代ごとに少しずつ多様化させてきたのである。

アンケ・ベルナウの『処女の文化史』(2007)は、主にイギリスとアメリ

カの近現代文学に例をとりながら、コルバンの議論を補ってくれる。処女性は純潔、正直さというイメージに結びつけられ、キリスト教の影響下で処女は夜明けの光、白雪、きらめく宝石、輝く星に喩えられてきた。無垢と真実の光の寓意なのである。興味深いことに、処女をヒロインとする現代のロマンス小説でも、この構図は強固に維持されているという。彼女が出会い、魅かれる男たちは社会的な成功者だが、その成功の代償のように人生に醒めたまなざしを向け、愛の可能性に懐疑的である。ところが処女の純潔性に出会うことで男はその態度を改め、不毛な絶望から救済されるのだ³⁾。

夢の女から若い娘へ

以上がコルバン『夢の女たち』の概要である。歴史家が描いてみせた夢の女の相貌は、われわれがこれから問題にする若い娘の文学的表象といくつかの点で共通する。若さ、美しさ、純潔、どこか謎めいた神秘性、脆弱さと強さの共存、高貴性などである。長い歴史をつうじて継承され、現実性を稀薄にした神話的な表象である夢の女は、19世紀フランスにおいては現実的な存在としての若い娘に変貌する。それは生身の肉体を具え、日常生活のさまざまなシーンを生き、ときには過酷な人生を送る人間にほかならない。

文学表象として夢の女と若い娘のあいだにあるもうひとつの差異は、その身体性の有無である。夢の女にあっては、女性として成熟していく過程は一種のタブーであり、彼女に恋慕する青年たちにとって女の成熟は存在しない。とりわけ性的身体としての側面は完全に排除され、女は霊化された存在として姿を現わす。無垢で純潔な状態に留まり続けるのが理想的な夢の女である。他方、10代から20代前半までの若い娘は、身体的にも精神的にも少女から女へと大きく変貌していく。彼女はいずれ成熟するし、その予兆としてすでに男たちを惑わす、あるいは男たちの心をかき乱す何かを具えている。実際は単純で、素直で、無邪気なだけかもしれないのだが、彼女を見つめる男たちが謎めいた魅惑、生まれつつある成熟と官能性を過剰なまでに読み取って

3) アンケ・ベルナウ『処女の文化史』夏目幸子訳、新潮社、2008年、p. 112以下。

しまうのである。

孤高の女神ディアーナを淵源とする夢の女は、同じく神話に祖型が見いだされるヴィーナス的な女たちと対比することで、その特徴がより明瞭になる。ヴィーナス的な女、つまり官能的で、男たちを誘惑し、欲望の対象になり、快樂の主体になる女たちであり、それは身体性を抹消され、欲望を口にしない夢の女とは対蹠点に位置する。19世紀の若い娘は、ディアーナとヴィーナス両方の属性をさまざまな配分で兼ねそなえている。

同じように、19世紀的な若い娘の輪郭は、ブルジョワ社会と都市化がもたらしたひとつの女性カテゴリーとの鋭い対比のなかでいっそう明確になる。すなわち娼婦である。当時のブルジョワ階級の男たちにとって（作家と芸術家の大部分はブルジョワ階級に帰属する）、単純化すれば女は二種類に分けられる。しかるべき教育を受け、貞節と清純さを内面化し、無垢のまま妻となる女性か、男の欲望に惜しげもなく身体をゆだね、ときには男を挑発する女性か。要するに天使か、娼婦か。

現代のわれわれならば、あまりに無邪気な二分法と考えるが、当時のブルジョワ社会の道徳においては結婚前の娘の処女性が重んじられていた。良家の娘たちが結婚前に男たちと交際するという慣習はなかったし、上流社会ほど結婚は親同士が両家の社会的、経済的釣り合いを考慮しながら決めたのであり、当事者の意向が考慮される余地はほとんどなかった。娘の処女性は、ブルジョワジーの結婚戦略にとってたいせつな切り札のひとつだったのである（他方、農民や都市労働者のあいだでは事情が異なる）。

ブルジョワの青年たちは、抑えがたい欲望を満たすために娼家に通い、娼婦が彼らに性の手ほどきをした。あるいは一家に雇われている若い女中が、青年の性的戯れの相手になった。フランス語で *amour ancillaire*（女中との情事）と呼ばれる現象である。娼婦や女中との性的関係は、良家の娘の純潔と処女性を守るための必要悪、ひいては家族制度を維持するための必要悪と認識されていたということである。若い娘がそうであるように、娼婦もまた文学、とりわけ19世紀後半の小説において頻繁に登場し、絵画がしばしば描いたモチーフであることは言うまでもない。ここでは文学における娼婦と

売買春の表象を論じる余裕はないが⁴⁾、バルザック『人間喜劇』に登場するエステルやコラリー、デュマ・フィスの代表作『椿姫』(1848)の主人公で高級娼婦のマルグリット、フロベール『感情教育』(1869)に登場するロザネット、ゾラの『ナナ』(1880)の主人公、そしてモーパッサンやユイスマンスの小説に姿を現わす数多くの街娼など、例は枚挙にいとまがないほどだ。

セクシュアリティをめぐるこうした二重基準が存在したからこそ、そしてそれがブルジョワ青年たちのあいだに広く浸透していたからこそ、純真無垢な若い娘が現実としても、文化的表象としても成立しえたのである。

ロマン主義時代の若い娘

19世紀前半のロマン主義時代は、文学と芸術において愛の情念を崇高な価値にしたてあげた。そして純潔で無垢な若い娘が物語のヒロインとして登場してくる。それは身体性を稀薄にされ、それゆえ精神性を強調され、俗世の穢れを知らない(とされる)若い娘たちである。その嚆矢はベルナルダン・ド・サン＝ピエール『ポールとヴィルジニー』(1788)であろう。インド洋に浮かぶ熱帯の島フランス島(現在のモーリシャス島)を舞台に、兄妹のように育ったポールとヴィルジニーの悲恋物語である。博物学者でもあった著者による南洋の島の自然描写が名高く、二人が暮らす村は悪や葛藤を知らないユートピア的な共同体の様相を呈している。フランス島は王政フランスの植民地であり、多数の黒人奴隷を使ってプランテーション経営をしていたのだが、作品中にはそのような植民地主義の現実がほとんど影を落としていない。

小説のなかで、ヴィルジニーはしばしば「汚れをしらない *innocente*」女と形容され、「無垢 *innocence*」は彼女の本質をなす。彼女の貞淑と恥じら

4) フランス文学における娼婦像については、たとえば以下の著作を参照のこと。
村田京子『娼婦の肖像 ロマン主義的クルチザンヌの系譜』新評論、2006年。
小倉孝誠『恋するフランス文学』慶應義塾大学出版会、2012年、第3章。
Mireille Dottin-Orsini, Daniel Grojnowski, *L'Imaginaire de la prostitution. De la Bohème à la Belle Époque*, Hermann, 2017.

いがもっともよく表われるのが、フランスから島に帰還した際に、乗っていた船が嵐のせいで座礁するシーンである。たくましい船乗りが彼女を救おうとするが、そのためには彼女が衣服を脱ぎ捨てなければならない。自分を助けようと岸辺にやって来ていたポールの姿が目に入ったヴィルジニーは、愛する男の目に裸身をさらすことは受け入れられない。そのため、静かに目を天のほうに向けながら荒波に呑み込まれていく。恥じらいと、慎ましさと、美德を優先して、あえて死を選んだのである。そのとき作者ベルナルダンはそのように書き記す。

ヴィルジニーは死が避けがたいとみてとり、片手で衣服をおさえ、もう一方の手を胸にあてると、静かに天を仰いだ。まるで天高く舞いあがろうとする天使のようだった。⁵⁾

無垢で純真な娘たちを描く19世紀の宗教的イメージ体系は、この天使の比喩をしばしば援用することになるだろう。この挿話の時期がクリスマスの日を設定されているのは偶然ではなく、作者はヒロインの死に聖性を付与しようとした。そこでは、女性がまなざしを天に向けるという身ぶりが宗教的救済の寓意として読み取られていく。

シャトーブリアン『アタラ』(1802)のヒロインは、処女性を喪失することよりもあえて死を選ぶ。愛する男と結ばれるまでは純潔でいるという誓いを母親に立てた彼女は、その誓いを破ることは耐えられず、毒を仰いでみずからの命を絶ってしまう。死んだアタラは恋人のシャクタスの目に、「眠れる純潔(＝処女性)の像」⁶⁾のように映る。天使性と純潔性と無垢はロマン主義的な若い娘を際立たせる属性だ。

この系譜に、ラマルチーヌ作『グラツイエツラ』(1844年執筆)のヒロインをつけ加えることができるだろう。遍歴の旅に出た主人公である18歳の

5) Bernardin de Saint-Pierre, *Paul et Virginie*, « Folio », 1984, pp. 224–225.

6) Chateaubriand, *Atala*, dans *Œuvres romanesques et voyages*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. I, 1969, p. 89.

青年は、その途中でナポリに滞在し、地元の漁師の娘グラツィエツラと出会って恋に落ちる。彼が病の床に伏し、彼女が青年を献身的に看病したことがきっかけである。牧歌的な世界に生きる農民や漁師たちのあいだで、グラツィエツラはやがて少女から女へと変貌していく。青年が『ポールとヴィルジニー』を読む場面が描かれているのがじつに象徴的で、この作品が「無邪気な愛の手引き書」と形容されている⁷⁾。やがて青年がフランスにひとり戻っていくと、若い娘は憔悴してわずか16歳で息絶えてしまう。

引用した三作品の舞台が南洋の島、アメリカ大陸、そしてイタリアと、いずれも異国に設定されているのは示唆的である。ヴィルジニーは、逃れるように祖国を離れたフランス人の両親のもと植民地で生まれた女、アタラはアメリカ先住民族の娘、グラツィエツラはナポリ近郊の漁村に生まれたイタリア女だ。異国趣味はロマン主義文学の特徴だが、ヒロインを異国の風土に配置することで、作家たちは文明や近代社会の力学に束縛されない、牧歌的でほとんどユートピア的な空間を創出しているようにみえる。そのため若い娘の純潔さや無垢がいつそう際立つ、という効果もたらされている。女が青年に恋し、青年から愛され、しかし愛の悦楽を知ることなく、ときには愛の言葉さえ明瞭に口にする事なく命が絶える、というのが三作に共通している。若い娘を中心に紡がれる愛の物語において、異国趣味と悲恋は相性がいいのだ。

ロマン主義的な若い娘は身体性が稀薄であり、そもそも身体について語ることはないし、みずからの身体を見つめることすらほとんどない。「夢の女」たちがそうだったように、半ば霊化された存在である。彼女たちを愛した男たちは、恋人の死を深く悲しみ、絶望に駆られる。ポールは悲嘆のあまり、ヴィルジニーの死から二か月後に息絶えるし、シャクタスはアタラの死を永遠に忘れられず、物語の語り手に向かってその死を述懐せざるにいられない。フランスに戻った『グラツィエツラ』の主人公の青年は「若すぎる男は愛する術を知らない。ものごとの価値が分かっていないのだ！ほんとうの

7) Lamartine, *Graziella*, « Folio », 1979, p. 86.

幸福は、失った後ではじめて分かるのである』⁸⁾と後悔しながら告白する。しかし時すでに遅く、それから数か月後に手紙でグラツィエツラの死を知った青年は悲嘆に暮れるばかりである。

しかし若い娘は遠い異国の地だけでなく、同時代のフランス、とりわけパリにも存在していた。その生態は先にのべたような近代ブルジョワ社会の進展と不可分に結びついている。そして19世紀にこの若い娘について語ったのは、作家だけではない。ジャーナリスト、医学者、礼儀作法書の著者などもそこに含まれている。次にその言説を読み解いてみよう。

「生理学」の言説

19世紀前半のジャーナリズムで、「生理学」と呼ばれるジャンルが流行した。医学の一分野としての生理学とは関係なく、同時代人の習俗や趣味、さまざまな職業や社会的カテゴリー、パリの諸制度と生活空間を記述したジャンルで、現代のルポルタージュに近い。一般に複数の書き手による共著であり、ときには10巻を超えるシリーズとして刊行された。これらの著作には木版画やリトグラフ（石版画）による挿絵が添えられるのが通例で、その作者としてグランヴィル、ガヴァルニ、ドーミエといった、時代を代表する挿絵画家や版画家が名を連ねていた。生理学はパリの制度や、習俗や、職業を言説として語っただけでなく、視覚的イメージを活用して首都パリを文字どおり可視的な空間に創りあげたのだった。

この生理学シリーズのいくつかで、若い娘が章として立てられている。それは、若い娘がたんに年齢だけによる規定ではなく、お針子や人妻や母親や娼婦などと同じくひとつの社会的カテゴリーとして認識されていたことを意味する。たとえば、パリをめぐる生理学の嚆矢とも言える『パリあるいは百一の書』（全15巻、1831-34。タイトルは101人の著者が寄稿したことに因む）の第3巻で、「パリの若い娘」と題された章の著者ブイーは、実話にもとづいた物語の形式で、同時代のパリに暮らす若い娘たちのさまざま

8) *Ibid.*, p. 183.

なタイプを素描する。その意図は次のようなものだった。

私は、パリの若い娘たちを正確に描いてみせよう。そして、社会のあらゆる階層で、若い娘たちが女性の名誉と栄光になるような、模範を示してくれることを証明してみせよう。⁹⁾

こうしてブイーはレース職人のエステル、子爵家の娘クロランド、裕福な銀行家の娘レオニー、そして役人の娘エンマという、同じ建物に住む四人の人生を交錯させる。同じ建物といっても、上階にいくほど狭く暗い部屋になり、彼女たちの階級性は住居の配置と設備にも歴然と表われている。性格も多彩で、クロランドは高慢、レオニーは無頓着、エンマは堅実と性格は描き分けられている。働いているのはエステルだけで、親孝行で、慎ましく、まじめで腕のいい職人である彼女は仕事面でも、対人関係においても周囲の評判が高い。家族内の仕事が順調に発展し、やがてエステルは小さな作業場を構えて数人の女工を雇うまでになる。善良な若い娘の成功物語である。

1830年の七月革命によってブルボン王朝が倒れて七月王政が成立すると、政治的、社会的な変動が人々の運命を大きく変える。子爵は亡命し、妻と娘クロランドは親戚のもとに身を寄せざるをえなくなるし、銀行家は事業が破綻して負債をかかえた末に自殺し、財産が差し押さえられてしまう。エステルはクロランドとレオニーに仕事を斡旋することで、経済的な援助を行ない、二人から感謝の目を向けられる。他方エンマは、父親の同業者の堅実な青年と結婚して家庭を築く決心をする。階級的な差異は明示されるものの、この物語には根源的な悪やいまわしい背徳がない。若い娘たちは困難な状況をけなげに克服し、時代の風浪に静かに耐える。慎みをそなえた勇気と、汚れない無垢が娘たちの特性であり、それが彼女たちを保護してくれるのである。ブイーが描いた1830年前後の若い娘たちは一種の楽園に暮らしていた。

9) *Paris ou le Livre des cent-et-un*, Ladvocat, t. III, 1831, « Les Jeunes filles de Paris », p. 30. なおこの著作は、アティーナ・プレス社から復刻版が刊行されている (2016–2018年)。

同じく生理学ものの代表作である『フランス人の自画像』（全9巻、1840-42）では、その第一巻にやはり「若い娘」が立項されている。こちらは作家ラベドリエールが四ページにわたる長詩という形式で、若い娘の個性を理想化してみせる。娘の若さと美しさは、さまざまな闇と苦難にみちた世界を照らしだす光のようなものであり、未来への希望を紡ぎだす。慎み深さ、敬虔さ、慈愛、そして無垢が彼女の特徴である。

若い娘の慎み深い顔には、彼女の魂が映しだされている。

その魂は聖なる慈愛の炎に強く影響される。〔中略〕

若い娘は汚れなき魂の香りを神にささげ

瞑想によって高みに昇り、

自分の姉妹である天使たちに近づく。¹⁰⁾

高い美徳をいくつも具えた若い娘は、こうして天使に比肩される。身体性を稀薄にされ娘、天使化された娘は、先に触れたコルバンがその輪郭を示した夢の女たちと同じ表象世界に位置づけられるだろう。ブイーエラベドリエールの作品が喚起する若い娘は、同時代のシャトーブリアン『アタラ』やラマルチヌ『グラツィエツラ』のヒロインによく似ているのだ。ロマン主義時代の生理学と小説は、異なるレトリックと物語を展開しながら、姉妹にほかならない若い娘たちの肖像を描いたのだった。

19世紀末における若い娘の変貌——モーパッサンとグールモン

ところが19世紀末になると、文学においてもジャーナリズムの言説においても若い娘に関する議論の構図が大きく変化する。無垢で慎み深い存在から何かしら謎めいた存在へ、身体性の稀薄な天使の人間から身体的な存在感を濃密にただよわせる人間へと、人々の集団表象が作りあげる若い娘の肖像が描き変えられるのである。

10) *Les Français peints par eux-mêmes*, t. I, 1840, « La Jeune fille », p. 258.

1884年はその点で象徴的な年と言えるかもしれない。ゾラの『生きる歓び』とエドモン・ド・ゴンクール『シェリ』がほぼ同時に刊行されたのである。前者はノルマンディー地方の海辺の町を舞台に、ポーリーヌというブルジョワの娘が孤児となって親戚のシャントー一家に引き取られ、成長していく物語であり、後者では上流階級に生まれ、陸軍大臣を祖父にもつシェリが、パリの華やかな世界で生きる19年の短い生涯が語られる。物語の舞台と人々が帰属する社会階層が異なるとはいえ、若い娘を作品の中心に据えてその心理、身体、精神的な苦しみ、子供から娘へと成長する困難な過程、思春期の迷いと不安と喜びなどを表出した点は共通している。

モーパッサンはこの二作品が出版されたのを機に、1884年4月27日付けの『ゴーロワ』紙にずばり「若い娘」と題された記事を寄せ、この二作品が若い娘をめぐる文学表象をみごとに刷新したと称賛するとともに、なぜこれまで作家たちは若い娘の精神と身体のあらゆる側面を分析しようとしなかったのか、と問いかける。たしかに『ポールとヴィルジニー』はあったが、ヴィルジニーは生身の娘というより、一個の観念であり、抽象的なイメージにすぎない（ここでもこの作品がロマン主義的な若い娘像を提出した典型的な作品と見なされていることが確認できる）。

もっともこれはモーパッサンの戦略で、スタンダールの『赤と黒』（1830）のマチルド、バルザックの『ウジェニー・グランデ』（1833）の女主人公、ユゴーの『レ・ミゼラブル』（1862）に登場するコゼットなどをおそらく意図的に等閑視している。いずれにしても1880年代の新しさは、モーパッサン自身を含めて、作家たちが「若い娘」あるいは少女の謎めいた相貌に当惑しているということなのだ。

モーパッサンの主張は、若い娘を知ることとはほとんど不可能だという点に集約される。彼女の生活圏域は作家（ここでは男の作家ということだ）から遠く離れたところに位置し、作家が彼女に話しかけることは少なく、彼女の考え、夢想、懊悩の奥深くまで入りこむことはできない。そもそも若い娘は自分自身をよく認識していないのだ、とモーパッサンは言う。現実の襲と秘密の深部に分け入り、観察と分析によって文学を構築する当時のリアリズム

作家にとって、それゆえ若い娘は扱うのが困難な主題だったということになる。

若い娘自身も無視する微妙な感覚をどのようにして見つけだせるのだろうか？ 彼女はその感覚を説明できず、理解できず、分析することもできない。そして女として成熟したらその感覚をすっかり忘れてしまうだろう。さまざまな秘密の想い、生まれいずる恋心、芽生えはじめた感情、形成されつつある性格のかすかな動き、そうしたものをどのように見抜けるのだろうか？¹¹⁾

モーパッサンによれば、若い娘というのは過渡期の存在、いまだ女として成熟する以前の曖昧で不確かな存在にすぎない。愛、情熱、官能、美德はまだ形成されておらず、ただその漠然とした萌芽が感じられるにすぎない。おそらく内面性が稀薄なのだろうが、その稀薄さが一種の意味深い謎としてとらえられている。同じような認識は、作家が数か月後に発表した短編『イヴェット』（1884）においても表明されている。ある作中人物が次のように述べるのだ。「まったく、あの娘には当惑するんだ。おかげで眠れなかったよ。女の子というのは妙なものだ。ごく単純に見えるが、実際のところは何も分からない。経験を積み、恋を味わい、人生を知っている女なら、何を考えているかはすぐ察しがつく。ところが生娘が相手となると、何も見抜けないのだ」¹²⁾。

ここには、中年の男性作家が年若い娘の内面性の謎と、その不可解な神秘性に戸惑う姿、そして若い娘の心のなかにおそらく過剰なまでの意図と秘密を読み取ってしまう姿が看取される。それに対して彼女が成熟し、恋愛し、結婚してひとりの女になってしまえば、文学者にとっては分析することが容

11) Maupassant, « La Jeune fille », *Chroniques. Anthologie*, Librairie générale française, 2008, p. 299.

12) Maupassant, « Yvette », *Contes et nouvelles*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. II, 1979, p. 258.

易になる。もはや子供ではないが、さりとして成熟した女でもない若い娘は、その中間領域として、不透明で、神秘的で、謎めいた存在に映ったのである。いずれにしてもモーパッサンは、『生きる歓び』と『シエリ』が、このような若い娘の心理と生態に迫った価値ある文学的試みだとして評価したのである。彼は娘時代が女の子供時代と結婚を隔てる期間であり、結婚と同時に女が新たな存在となることを指摘したわけだが、それによって若い娘がひとつの社会的存在であることも認識していた。

こうした神秘性、おそらくは実体の稀薄な神秘性を付与された若い娘は、20世紀になればブルーストの作品に登場する「花咲く乙女たち」として開花することになるだろう¹³⁾。あるいは現代のわれわれには、むしろナボコフの『ロリータ』(1958)が想起されるところだろうか。「ロリコン」の語源となったこの淫靡で周到な作品は、中年男が12歳の娘に惚れ込み、翻弄される物語である。もっとも、あどけなく無邪気に見えたロリータが、じつは男を手玉にとる宿命の女としての相貌を最後に露呈するのだが。

モーパッサンの記事からおおよそ20年後、批評家レミ・ド・ゲールモンが「現代の若い娘」(1901)という時評で、同じ観点を共有している。妻や母になるまでの過渡期とはいえ、そして当時の女性の結婚年齢を考えればその過渡期はけっして長くなかったとはいえ、思春期と娘時代が女性のライフサイクルにおいて重要な位置を占めることが確認されている。ゲールモンの特徴は、19世紀はそれ以前の時代に比べて結婚年齢が上昇したせいで、娘時代がしだいに伸びたこと、その時間の猶予が若い娘を「新たな社会的単位」¹⁴⁾として成立させたことを指摘している点である。

晩婚化だけが問題なのではない。1870年代以降、時の第三共和政は良識をそなえた市民を創りだすため公教育制度の拡充と整備に努め、その一環と

13) ブルーストの小説における若い娘の表象については、次の著作を参照していただきたい。湯沢英彦『ブルースト的冒険——偶然・反復・倒錯』水声社、2001年、第5章。

14) Rémy de Gourmont, « La Jeune fille d'aujourd'hui », *La Culture des idées*, Robert Laffont, « Bouquins », 2008, p. 252.

してそれまで軽視されていた女子教育を改善した。女子とりわけブルジョワ階級の女子が中等教育、さらには高等教育の分野に参入することによって、独身時代が延長されるようになっていた。若い娘とはまさに、家族制度と結婚観の変化、そして教育システムの発展が相乗的に作用したところで生まれたひとつのカテゴリーだったのである。

要するに18世紀までも、それ以前もいつでも、さまざまな若い娘たちは存在した。だが類型としての「若い娘」はいなかった。類型としての若い娘は19世紀の発明である。それは晩婚化ゆえに当然生じた現象であり、晩婚化は世襲制の衰退から生じた現象にはかならない。¹⁵⁾

社会と習俗の変化に由来する現象として若い娘の存在をとらえたグールモンは、しかしモーパッサンと異なり、彼女のうちに秘密や神秘性や謎めいた影を読みこむことはない。若い娘の脳裏に宿るのは愛や情熱の夢想であり、素敵なお相手に出会うことへの希望であり、娘時代とは結婚前の不安定で、しばしば不毛な過渡期である、と説明するくらいだ。他方で、ロマン主義文学に見られたような若い娘の無垢、慎み深さ、敬虔さを強調する姿勢、要するにその天使性を言祝ぐ姿勢とも無縁である。現代でも若い娘の無垢や、無邪気さや、美德が際立たせられることがあるとすれば、それは女の身体性や官能性を巧妙に隠蔽するためのレトリック戦略にほかならず、結婚相手の女性に処女性を要求していたブルジョワ男性の幻想なのだ。「家庭を築く若い女性というイメージは、男性の、雄の発明品である」¹⁶⁾とグールモンは主張してはばからない。当時の男としては、グールモンは男女関係の表象をめぐるジェンダー的な力学によく気づいていたと言うべきだろう。

とはいえ、グールモンが社会や家庭や男にたいして女の自立と解放を求める「女性解放論者」だったわけではない。むしろ、彼は晩婚化や女性の解放には懐疑的であり、家庭生活にこそ女の幸福があると考えた伝統主義者だっ

15) *Ibid.*, p. 252.

16) *Ibid.*, p. 254.

た。19世紀末の社会情勢や習俗の変貌を意識しながら、そして同時代のフランス人たちの不安を共有しながら、彼は若い娘という存在が創出された歴史的経緯に迫り、たとえばモーパッサンに見られるような若い娘にたいする、時には根拠のない神秘性をまとわせられた若い娘の肖像を脱神話化してみた。若い娘は天使でもなければ、謎めいた存在でもない。それは繊細な魂と脆弱な身体をそなえた社会の一単位として措定されたのである。

エドモン・ド・ゴンクール作『シェリ』の意図

生理学ジャンルやジャーナリズムの言説を離れて、文学の領域に目を向ければ、若い娘はどのように語られてきたのだろうか。18世紀の『マノン・レスコー』のヒロインや、19世紀になればバルザック、スタンダール、さらにはユゴーやミュッセの小説には、異なる社会階層に帰属するさまざまなタイプの若い娘が登場する。『ウジェニー・グランデ』の主人公や、『レ・ミゼラブル』に登場するお針子ファンティーヌや、その娘コゼットを想起すればいいだろう。そうした女性像と比較して19世紀末の小説に登場する若い娘の表象において特徴的なのは、その身体と病理にたいして鋭い視線が向けられたということだ。魂としての若い娘から、生理学的存在としての若い娘へ、愛によって浄化される娘から、身体によって苦悩を味わう娘へ。その変貌こそが、19世紀文学における女性表象を特徴づける分水嶺と言えるだろう。その点を、ひとつの作品にそくして分析してみよう。モーパッサンが新聞記事で論じたエドモン・ド・ゴンクール作『シェリ』で、その梗概は次のとおりである。

代々続く軍人の家系オダンクール家に1851年に生まれたシェリは、幼くして父を失い、母は夫の戦死の衝撃で精神を患い、幽閉されてしまう。一族の領地アルザス地方のル・ミュゲで、シェリは祖父のオダンクール元帥と使用人に囲まれながら成長していく。やがて元帥が、ナポレオン三世に請われて陸軍大臣に就任すると、シェリもまた田舎の地所を離れてパリに移り住み、町の中心部に位置する広い公邸で暮らすことになる。祖父に溺愛され、望むものはすべて手に入るような環境のなかで、シェリはパリ上流社会の習俗と

社交術を学んでいく。同年代の女の子たちとの交際、病、読書、音楽、社交界へのデビューなどが思春期のシェリの生活を彩る。人目をひく際立った美貌の持ち主で、ファッション感覚にすぐれ、家柄も申し分ないシェリは真の恋を経験することもなく、1870年6月、わずか19歳で息絶える。

『シェリ』は小説としては起伏に乏しく、主人公の運命を変える劇的な事件が起こるわけでもない。それは作家自身がよく自覚していたことで、この作品はロマネスク性を追求するのではなく、一人の娘の誕生から、幼少期、思春期をへて早い死に至るまでの人生を叙述した、第二帝政時代の若い娘をめぐる「個別研究」^{モノグラフィ}になっている。これより三年前に出た『ラ・フォースタン』(1881)の序文のなかで、ゴンクールは次のように主張していた。「私は、首都の温室で育てられ、成長する若い娘に関する心理学的、生理学的研究となるような小説、人間についての資料に依拠した小説を書いてみたい」¹⁷⁾。『シェリ』はこの意図を実現した作品なのである。

作家は、若い娘を登場させた文学がすべて男の視点から語られるばかりで、女性自身の声と感覚、かつては若い娘だった女性自身の声と感覚がそこに響いていないと嘆いた。女性の内面深くに宿り、しばしば男たちには未知な「女性性 *féminilité*」が等閑視されていると批判したのである。見慣れないこの *féminilité* という語はゴンクールの造語で、すでに1850年代から使用されていた。『シェリ』を執筆するため、彼は女性の友人や知り合いから娘時代の経験に関する証言と思い出を収集して、研究用の資料にした。ゴンクール兄弟の『日記』には、第二帝政期から第三共和政期のパリ上流社会の女性たちの習俗やファッションをめぐって、数多くの細部が記されており、そうした記述はときにそのまま『シェリ』の挿話として取りこまれている。その意味でこの小説は、個人の貴重な証言や記憶を活用したうえで書かれた若い娘の個別研究であり、同時代の若い娘の心理と生理に関する歴史書の輪郭をまとっているし、ゴンクールは「序文」のなかでそのことを自負していた。

17) Edmond de Goncourt, *La Faustin*, 10/18, 1979, p. 179.

小説『シェリ』は、歴史書を執筆する際におこなうような探求を経て書かれた。こう言ってよければ、子供時代から20歳までの時期の女性について、女性という存在の秘められた女性性 *féminilité* について述べた本はほとんどない。これほど多くの女性の談話、打ち明け話、告白をまじえて創作された作品はほとんどない。¹⁸⁾

若い娘の身体と病理

ル・ミュゲの牧歌的な田舎に生まれたシェリだが、その子供時代はけっして幸福な雰囲気には包まれてはいない。愛する夫の戦死に衝撃を受けて精神の均衡を失った母が、地所の片隅に設けられた四阿に幽閉されたせいで、シェリは母との接触を絶たれ、母の愛を奪われる。オダンクール元帥に仕える使用人たちが彼女の世話をし、周囲の自然の魅力に開眼させようとするが、母方の遺伝もあるのだろうか、シェリは感覚が過敏で、精神的な不安定さを示し、「神経的にとりわけ繊細な」¹⁹⁾ 女の子として成長する。作者はヒロインが神経症的な体質の持ち主であることを示唆しているのである。

シェリがバリの中心部サン＝ドミニク通りの屋敷に住むようになると、その傾向はいっそう強まっていく。これ以後、人生のさまざまな出来事はすべてシェリが幼い子供から、思春期を経て若い娘に成長していく過程に寄与する出来事として記述される。いや成長というより、シェリの病的素因がしだいに顕在化していく過程としてというほうが正確だろう。そしてその過程は、身体的に若い娘として形成されていく過程、「女性性」が芽生え、シェリがそれに当惑し、やがて受け入れ、しかしそれを開花させることのできない苦悩を背負う過程と重なりあう。猩紅熱を患ったときは、「女の子はこの病から回復すると、驚くほど成長する。女の子のなかで、精神的な女が少しだけ姿を見せるのだ」²⁰⁾。12歳で初めての聖体拝領を受けるに当たっては、この宗教儀式的なかに官能的な雰囲気、ほとんど性的な愉悦を覚えるほどだ。そ

18) Edmond de Goncourt, *Chérie*, La Chasse au Snark, 2002, pp. 40–41.

19) *Ibid.*, p. 87.

20) *Ibid.*, p. 128.

して13歳でシェリが初潮を経験すると、作家はそれが女の子から女性への変貌を遂げる「身体的革命」だとして、同時代の医学書に依拠しながら、パリと地方における初潮年齢の違いについて一般的な命題を提出する。

シェリのからだで、女の子が愛の被造物、月経のある女性に変貌するという謎めいた現象が起こっていた。

パリの女の子では、生殖能力をもたらすこの身体的革命が、フランスの諸地方に住む女の子よりも一、二年早く生じる。これは医学によって確認されていることで、パリの女の子の思春期は13歳から14歳のときに始まるのだ。私が受け取った母親たちからの手紙によれば、専門家の医師たちの著作で示されている年齢よりもっと早くに初潮が始まったという例さえある〔中略〕。

サロンの沸きたつような雰囲気、想像力の刺激、恋の誘因、女の子たちが自分のなかで響かせる音楽のリズム、そうしたものが女の形成を促し、早めるのだ。温室の湿った暖かさが花の開花を促すのと同じである。²¹⁾

ゴンクールが医学に言及しているのは、彼がこの挿話を語るに際して、生理学者ラシボルスキーの『月経概論』を参照したからである²²⁾。統計や、世間の母親たちから届いた手紙を引き合いに出すのは、社会学者としての振舞いと言えよう。女子の初潮は誰にとっても秘密ではないが、それ以前の文学であからさまに語られたことはない。『シェリ』と同年に発表されたゾラの『生きる歓び』でも、ヒロインの娘ポーリーヌの初潮が重要な出来事として

21) *Ibid.*, pp. 150–151.

22) Cf. Jean-Louis Cabanès, *Le Corps et la Maladie dans les récits réalistes (1856–1893)*, Klincksieck, t. I, 1991, p. 137. なお19世紀の医学者や生理学者が若い娘の身体に強い関心を寄せていたことは、次の論考でも指摘されている。Jean-Claude Caron, « Jeune fille, jeune corps : objet et catégorie (France, XIX^e–XX^e siècles) », dans Gabrielle Houbré (dir.), *Le Corps des jeunes filles de l'Antiquité à nos jours*, Perrin, 2001, pp. 174–177.

描かれている。19世紀前半のロマン主義や、それ以前の時代と異なり、自然主義文学は身体的で、生理学的な存在としての若い娘の姿を強調したのである。『アタラ』や『グラツィエッタ』のヒロインは無垢な処女であり、彼女を愛する青年たちにとって夢の女であり、その身体性は限りなく透明だった。他方ゴンクールやゾラの作品に登場する若い娘は、身体と生理によって規定される存在にほかならない。

シェリを身体的存在にするのは、猩紅熱や初潮といった直接身体に関わる次元だけではない。知性の作用、芸術の実践、社交生活の儀式などすべてが彼女に女としての欲望や、夢想や、興奮を注ぎこんでいく。ひそかに読み耽る世間で評判をとっている新聞小説では、官能的な不倫の恋物語が語られ、シェリに未知の悦楽の世界をかいま見せる。音楽を習うと、楽器の妙なる調和が彼女の心に漠然とした欲望をかき立てずにいない。香水の奥深い世界、華やかなファッションの趣味（第二帝政期の有名なクチュリエであるパンガやウォルトをモデルにした、ジャンティヤというデザイナーが登場する）がシェリの美と身体への意識を過剰なまでに研ぎ澄ませる。ファッション感覚に優れたシェリが身にまとうドレスや化粧は人々の称賛を浴び、男たちの視線を引きつけずにはいない。見つめられる身体としての若い娘、そしてみずからの身体に自己陶酔的に見入る若い娘——それが19世紀末の小説が提示するジェンダー表象である。『シェリ』やゾラの『ナナ』には、そうしたジェンダー表象がじつによく示されているのだ。

ゴンクールには、当時の男性作家としてはめずらしく女性ファッションへの深い造詣と繊細な趣味がそなわっていた²³⁾。彼を代弁するかのように、作中人物のジャンティヤは上流階級の女性たちの衣裳をデザインしながら、衣裳と化粧は自然を芸術の域にまで高める技術だと宣言するほどだ。しかし、そこには女性にとっての陥穽も潜んでいた。高井奈緒が指摘したように²⁴⁾、

23) Cf. Edmond de Goncourt, *Chérie*, *op.cit.*, p. 37. 校訂者の注によると、テオフィル・ゴーチエ、マラルメ、ブルーストと並んで、エドモン・ド・ゴンクールは女性ファッションについて造詣が深かった。

24) Nao Takai, *Le Corps féminin nu ou paré dans les récits réalistes de la*

シェリにあっては衣裳への情熱が昂じることが、神経症の高まりや充足されない性的欲望と表裏一体になっている。シェリは白いドレスを好むのだが、しかしその白はもはやロマン主義時代のように無垢や処女性の寓意として価値づけられるのではなく、病理の徴候として、来るべき死の予兆として機能するのだ。

こうしたさまざまな経験はシェリのうちに、まだ対象が見いだせない情熱、その名を口にできない漠とした渴望を芽生えさせる。それを決定づけるのが、バリの上流社会で頻繁に催される舞踏会である。艶やかなドレスに身を包んだ彼女は、元老院で開催される大舞踏会で、社交界デビューを果たすことになるのだが、それは16歳の娘が愛と結婚の市場へと参入する通過儀礼的な意味を有する。前述したように、19世紀ブルジョワ社会では女性が10代後半から20代前半で結婚した。社交界に足を運ぶこと、とりわけ舞踏会に姿を現わすことは、結婚戦略の不可欠な要素だったのである。青年たち（花婿の候補たち）とダンスを踊るのは、若い娘と青年が身体的に、ときには濃密に接触をもつということであり、とりわけワルツは官能的なダンスと見なされていた。社交界の習俗は若い男女の遭遇を設定し、官能性を刺激し、欲望を煽りたてる。ゴンクールはその妖しい魅力と危険な罠を指摘することを忘れなかった。

上流階級の生活、つまりこうした舞踏会や、コンサートや、夜会で若い娘は快樂を吸いこむ。

あらゆるものが若い娘の官能をそそり、彼女の欲望を目覚めさせ、肉体に語りかける。器楽曲のなめらかな音、美男のテノールが歌うけだるげなロマンス、踊り手の女が男の腕に抱かれてくるくる回り、失神するほどの陶酔感を味わうあのワルツ、熱帯植物の芳香をただよわせる暑さ、そしてシャンペンが注がれたグラス、といったものがそうだ〔中略〕。娘たちはそこでうっとりして、光と男たちのまなごしに酔いしれる。²⁵⁾

seconde moitié du XIX^e siècle, Champion, 2013, pp. 206, 231.

25) Edmond de Goncourt, *Chérie*, *op.cit.*, pp. 260–261.

しかし美しく、魅惑的な娘でありながら、シェリは求婚者になりうる青年たちに愛されることがない。愛と悦楽に憧れながら、それが充足されることはない。そして求められない美しさは不毛であり、満たされない愛の欲求は若い娘に神経症やヒステリーを誘発する。シェリは性についても、愛の快樂についても何も知らない。そしてまさにそれゆえ、小説の最後で彼女は衰弱し、精神的な変調を来し、神経症の発作を起こして卒倒してしまう。そのとき、周囲の男たちは彼女の哀れな変貌に驚き、目を背けてしまう。憐憫の念に駆られる以外は、もはや男たちはシェリに目を向けようともしない。一時期は社交界の女王として君臨し、男たちの視線を一身に集めたシェリは、もはや誰にも見つめられない娘であり、そうなれば彼女の存在理由は喪失する。彼女がわずか19歳で絶命するのは、それから数か月後である。

19世紀の初頭から末期にいたるまで、医学、生理学、ジャーナリズムの言説、文学が若い娘をめぐるさまざまな表象を紡いだ。文学の領域で言えば、世紀前半のロマン主義が無垢で天使的な若い娘のイメージを特権化したのに対し、後半のリアリズム小説は身体性と病理を色濃く刻印された若い娘を登場させた。文学的表象にうかがわれる変化は、女に向けられる男のまなざしのベクトルが変わったことを示し、同時に、男女の感情的、感覚的な力学が推移したことも明らかにしてくれる。「若い娘は19世紀の発明である」と批評家グールモンは主張した。確かにそうだろう。文学の言説は、その若い娘をめぐる集団的想像力の構図をあざやかに示してくれるのである。

付記：本論文は、文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(C) (課題番号16K02545)の助成を受けた研究成果である。またアラン・コルバン『処女崇拜の系譜』(山田登世子・小倉孝誠訳、藤原書店、2018年)に付した訳者解説と内容が一部重複していることをお断わりしておく。